

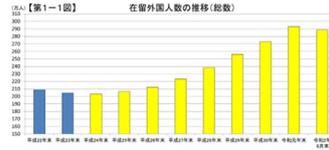
日本人と在日外国人のコミュニケーション

研究の背景と動機

・在日外国人の増加

→在日外国人数は、コロナウイルスのために、令和2年度のみ減少しているものの、平成24年末よりずっと増加傾向にある。

→コンビニエンスストアや登下校中にも外国人を多く見かける。



先行研究

○多文化共生とは？

・総務省によると、多文化共生とは、**国籍や民族**などの異なる人々が、互いの文化的ちがいを認め合い、**対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと**、と定義されている。

○各地域で行われている様々な多文化共生の取り組み

- 例・京丹後市→国際理解教室や交流パーティー、日本語ボランティア等。
- ・雲南市→外国人住民向けの情報提供・相談・同行業務、市民向けの多文化イベントの開催など。
- ・出雲市→生活情報を外国語や「優しい日本語」で記載したパンフレットの作成、日本語教室。

滞在年数や日本語の流暢さなどによって日本での暮らしも変わってくる



未だ解決できていない、問題視されていない在日外国人の悩み事や困ったことがあるのではないかな？

○在日外国人が感じている困難

①日本人の独特なコミュニケーション

日本人のコミュニケーションの特徴

- ・相手の出方を推し量るようなコミュニケーションの取り方
 - ・本音と建前の文化
 - ・ジャパニーズスマイル
- 日本人と親しくなる難しさを実感する外国人が多い

②日本社会からの疎外感

- ・日本人が閉鎖的
 - ・日本人からの偏見・差別
- 日本人との関係に満足していない

③日本人に英語で話しかけられる

- ・不愉快に感じる欧米人
- 英語の練習ができるという利己的な理由が明白

在日外国人へのインタビュー調査

課題

日本人で親しくしている人はいるか、また日本人と親しくなるのは難しいか
仮説1

日本人の独特なコミュニケーションが外国人と日本人が親交を持つことを妨げているのではないかな？

仮説2

コミュニケーションの取り方以外にも外国人と日本人が親交を持つことを妨げる原因があるのではないかな？

調査方法

○対象者：日本語教室に通う在日外国人

○方法：対面で行い、半構造化面接法を用いた。

○質問項目

- ①親しい日本人がいるかどうか
- ②仕事以外の日本人との交流があるかどうか
- ③言葉の問題に直面した時どのように対応するか
- ④日本に来て困ったことはあるか

結果

①親しい日本人がいるかどうか

いる→3人 いない→1人

②仕事以外の日本人との交流があるかどうか

ある→1人 ない→3人

③言葉の問題に直面した時どのように対応するか

- ・スマホを使う、日本語教室の人や英語ができる友達、会社の人に教えてもらう

④日本に来て困ったことはあるか

- ・全員が**言葉の違い**をあげた

今回のインタビュー調査の反省点

- ・日本語が上手に話せない方に**質問内容を伝えること**や**被験者の回答を受けて深く掘り下げて聞くこと**などが難しく、調査したいことを詳しく聞くことが出来なかった。
- ・日本に来て困ったことへの回答に被験者全員が「**言葉の違い**」をあげた。→限られた状況以外の人のインタビューも試みる必要がある。

在日外国人へのインタビュー調査2

調査方法

○対象者：3年以上日本に住む在日外国人(日本語話せる人4名、英語話せる人2名)

○方法：zoomで行い、半構造化面接法を用いた。

○質問項目

- ①親しい日本人がいるかどうか
- ②日本に来て1ヶ月目と1年目に感じた日本人の性格・印象
- ③日本語の曖昧な表現・難しい表現
- ④日本人とのコミュニケーションにおける疎外感

結果・考察

○日本人で親しくしている人はいるか、また日本人親しくなるのは難しいか

1. 日本人から誰も声をかけない (インド)
 - ・日本人は最初会ったときは誰も目を合わせない (インド)

→**外国人が日本人と話す機会**がそもそも少ない
2. 日本人のいるグループに入って仲良くなった (インド)
 - ・趣味が同じだった (イギリス)

→**日本人と話す機会がある場**を持っている人は、親しい日本人が得意ではないか

○在日外国人の意見(抜粋)

- ・日本で日本人と同じように生きたい (インド)
- ・外国人だから違う人として見られるのが嫌だ (イギリス)
- ・日本人として接して欲しい (イギリス)
- ・日本語が話せるのに名前だけを見て、英語で話しかけられる (フィリピン)



日本人と同じように接して欲しい

インタビュー調査を踏まえて

- ・在日外国人が住みやすい環境をつくるためには、**日本人側の問題点**を洗い出す必要がある

日本人高校生への質問紙調査

目的

日本人高校生はコケーションと南アジア人に出会ったときの状況によって**声をかける割合**と**英語で声をかける割合**に変化はあるのか、またそれは**研究対象の高校生**の(1)性別(2)英語の好き嫌い(3)英語の得意不得意(4)外国での滞在経験や外国人とこれまでに関わった経験(5)学校、によって変わるのかを調査する。

調査方法

・高校Aと高校Bに質問紙調査を行った。

高校A

国立の中等教育学校

調査学年：高校3年生

調査人数：109名

高校B

市立の高等学校

調査学年：高校2年生、高校3年生

調査人数：145名(高校2年生約80名、高校3年生約80名)

- ・状況による声をかける割合と英語で声をかける割合を調査するために、緊急性の違う3つの状況を作成した。

緊急性が高い順に…

- ・**けがをした様子で座り込んでいる**
- ・**地図が書かれた看板を見ながら困った表情をしている**
- ・**国際交流イベントで隣の席に座った**

ドナ



ニシャ



ジョー



アニク



研究対象の高校生の属性

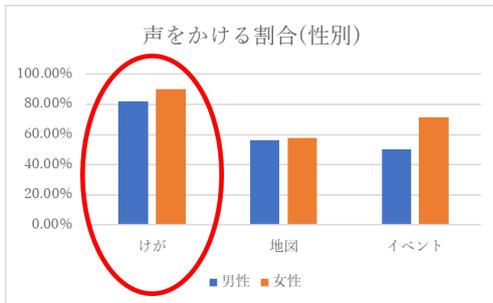
2~7の質問には、はい/いいえのどちらかで答えてもらった。

- 性別 男性/女性
- 英語は好きですか
- 英語は得意ですか
- 外国に1週間以上滞在したことがありますか(旅行も含みます)
- あなたは仲の良い外国人はいますか
- あなたは留学したことがありますか
- 家に外国人をホームステイで受け入れたことがありますか

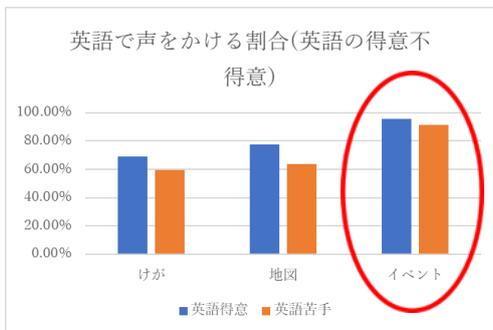
結果

○外国人に出会ったときの状況によって声をかける割合と、英語で声をかける割合は変わるのか

グラフ例1



グラフ例2



声をかける割合：けがの場面が一番高い

英語で声をかける割合：国際交流イベントの場面が一番高い

- 緊急性が一番高いけがの場面が一番声をかける割合が高くなっているのは、インタビュー調査でも在日外国人がのべていた「親切」や「優しい」など、日本人の特徴が表れているのかもしれない。逆に、緊急性がなくて声をかける割合が低くなるというのは、先行研究にもあった「**日本人が閉鎖的である**」やインタビュー調査で在日外国人がのべていた「**日本人から声をかけられない**」などの理由があるのかもしれないと考えられる。

○高校A、高校Bの結果

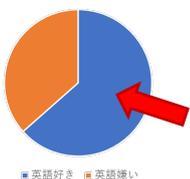
- 高校Aも高校Bも海外経験に関する質問で海外経験があると答えた人がとても少なかったため、今回とれたデータだけで分析することは難しいと考えた。また、英語の得意不得意に関する質問で英語が得意と答えた人が半分もいなかったため、英語の得意不得意に関するデータは一概には言い切れない。

高校A 有意差がみられたデータ

- 英語の好き嫌い：声をかける割合のみ
- 英語の得意不得意：6/7が声をかける割合

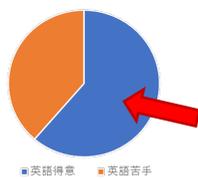
例1

声をかける割合(南アジア人男性、地図)



例2

声をかける割合(南アジア人女性、地図)



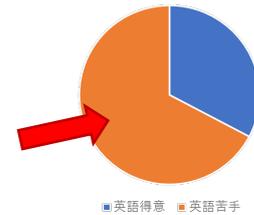
- 英語が好きの人や英語が得意な人ほど、声をかける割合が高い。

高校B 有意差がみられたデータ

- 英語の好き嫌い：有意差がみられたもの無し
- 英語の得意不得意：英語で声をかける割合

例3

英語で声をかける割合(南アジア人男性、地図)



- 英語が苦手な人ほど、英語で声をかける割合が高い。

考察

- 英語が好きの人や得意な人ほど外国人に声をかける傾向がみられたことから、日本人高校生は、「外国人とは英語で話す」という認識を持っている人が多いのではないかと考えられる。そのため、そもそも外国人に声をかける日本人の人数が、英語が好きの人や得意な人に限られてしまい、外国人と日本人がコミュニケーションをとる機会も限られてくるのではないかと考えられる。

- 今回調査した結果から、調査範囲は一部であるが、日本人高校生は、英語が得意と自負している人がとても少なく、英語が好きと感じている人も英語が嫌いと感じている人より少なかったり、過半数を満たさなかったりしたことから、日本人の英語に対する自信やモチベーションが低い傾向にあるということが考えられる。

全体のまとめ

- 今回の研究から、日本人高校生は「**外国人とは英語で話す**」という認識を持っている傾向があることが分かった。このことが、インタビュー調査から分かった在日外国人の、「**日本人に英語で声をかけられるのが嫌だ**」「**日本人として接して欲しい**」という想いに関係している可能性があるかもしれない。このような一部の在日外国人の方たちの日本での居心地の悪さは、日本人の外国人に対する意識を少し変えるだけで、在日外国人が住みやすい環境をつくることにつながるのではないかと考えられる。

本研究の課題

- 本研究では、在日外国人と日本人がお互いに快適に日本で過ごす環境を作るために、世間一般であまり問題視されていない外国人の困っていることや悩みがあるのかを調査した。インタビュー調査と質問紙調査を行って、自分自身も含め、「**外国人には英語で声をかける**」という認識を持った日本人高校生が多い傾向がみられた。学校での国際交流経験などから、そのような意識を持った可能性も考えられる。今後は、なぜ日本人高校生は、「外国人には英語で声をかける」という認識をもつ人が多いのかを調査したい。

参考文献

- 『入管白書(2020年版「出入国在留管理」日本語版)』
- 「多文化共生の推進に関する研究会報告書 ～地域における多文化共生の推進に向けて」(2006年3月)
- 徳田剛・二階堂裕子・魁生由美子(2019) 地方発外国人住民との地域づくり多文化共生の現場から p23 晃洋書房
- 三宅邦夫・陸申華(2019)『在日外国人が日本で上手に生きる方法』 p78, p86-88, p117 幻冬舎メディアコンサルティング
- 駒井洋・渡戸一郎(1997)「自治体の外国人政策—内なる国際化への取り組み—」 p229 明石書店
- 大野佳代子(2002)「日本人のコミュニケーション・スタイルについての一考察：会話の曖昧性」『東海女子短期大学紀要』28,p109-118
- Jung Yeonghae(2015)「外国籍(移住)女性をめぐる問題：日本で定住することの困難」『三田社会学』20,p52-64
- フィゴニー恵子(2012)「在日外国人に対する日本人の態度—ステレオタイプの視点からの考察—」『Mukogawa Literary Review』49,p93-111
- 岩男寿美子(1989)「日本人の対外国人態度」『フィナンシャル・レビュー』第12号